

心理学から見た「面影」の概念構造

大原 貴弘

1. はじめに：面影の心理学的理解

「面影がある」や「面影を重ねる」「面影を探す」など、「面影」という言葉は、日本において古くから用いられてきた。では、面影という表現が用いられるとき、どのような心理現象が生じているのだろうか。

大原(2020)は、面影を心理学の観点から捉え、以下のような複合的な認知機能から構成された心理現象であると考察した。

- (1) 眼前の対象をきっかけとした、今は眼前にない（かつてはあった）対象に関する記憶表象の想起。
- (2) 眼前対象と記憶表象の間の類似性についての評価。
- (3) 懐かしさや寂しさなどの感情・情緒の喚起。
- (4) 記憶表象を眼前刺激のなかに投影したり、探索したりする能動的反応。

ただし、面影という言葉には複数の意味が内包されている。面影の現代の辞書的意味としては、たとえば、広辞苑 第六版(新村, 2008)では「(1) 目先にはないものが、いかにもあるように見える、そういう顔や姿や物のありさま」や「(2) かおつき、おもごし、顔かたち」など、また大辞林 第三版(松村, 2006)では「(1) 実際に目の前にあるように心の中に浮かぶ姿・かたち。記憶に残っている顔や姿」や「(2) ある物を思い起こさせるよすがとなる印象や雰囲気」といった意味が挙げられている。

すなわち、面影には「心のなかの記憶や心的イメージ」という内在的意味と、「眼前の対象に見いだされるもの」という外在的意味の両方が含まれている。このことは、「面影が浮かぶ」や「面影を偲ぶ」のようにその表象を心の内面のほうに見出す表現もあれば、「面影がある」や「面影が残る」のように眼前の対象のほうに見出す表現があることからわかる。

本稿では、面影という概念に内包される複数の意味を整理し、その概念構造を心理学の観点から捉える。まず現在、面影がどのような意味で捉えられているかについて、質問紙調査を実施し、その結果について考察する。さらに、その知見を踏まえ、「知覚優位型面影」と「記憶優位型面影」という二つの面影のあり方を提案し、面影の概念構造の把握を試みる。

2. 面影の意味に関する質問紙調査：面影という概念に内包される意味構造

面影という言葉がどのような典型的な意味で捉えられているのかについて、質問紙調査を行った。まず、面影という言葉の意味や特徴、印象などについて自由回答を求めた(予備調査)。次に、予備調査において出現頻度の高かった語句を抽出し、面影との意味的関連度について評定を求めた(本調査)。本調査の結果に対して因子分析を行うことで、面影に内包される意味構造の把握を試みた。

2.1 予備調査

【方法】

調査対象者：大学生164名(男性76名、女性88名；平均20歳(16～26歳))。

調査内容：(1)面影とはどのような意味・特徴を持つ言葉か、(2)面影はどんな体験をしたときに使う言葉か、(3)面影という言葉を知ってどんなイメージ・印象を抱くかについて、自由回答を求めた。

【結果・考察】

得られた自由回答の総計は667件であった(一人あたり1～13件)。これらの回答内の頻出語を計量テキスト分析ソフト「KH Coder」で集計し、同じような意味の語群に分類した。

その結果、頻出語としては「人・人物(170件)」が最も多く、ついで「昔・過去・以前(155件)」や「似ている(127件)」「見る・見える(76件)」「顔・顔つき・顔立ち(69件)」「特徴・部分・要素(59件)」「今・現在(55件)」「雰囲気・様子(51件)」などが抽出された。

以上から、面影は「人物の顔を見たとき、過去の同一人物や血縁者と似ている特徴や雰囲気があると感じること」という典型的な意味を有することが示された。

2.2 本調査

【方法】

調査対象者：高校生、大学生ならびに社会人からなる138名(男性37名、女性99名、その他2名；平均29歳(16～83歳))。

調査内容：予備調査の自由回答において頻度の多かった語句を集計し、50の語群を作成した。それぞれの語群について「面影という言葉・概念と、どのくらい意味的に関係があると思うか」について5件法で評定を求めた。

【結果】

各語群に対する評定平均値と標準偏差を表1に示す。50個の語群の評定値の中央値(5.1)を基準にし、評定値が中央値よりも高い25個を「面影の中心概念」として、中央値よりも低い25個を「面影の周辺概念」として分類した。

さらに、中心概念25個の因子構造を把握するため、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。固有値(1.0以上)を基準に5因子を想定し、因子負荷量が0.4未満の7項目を削除

表 1 関連度の平均評定値 (SD) に基づいた「面影」の中心概念・周辺概念

中心概念 (全体の中央値5.1以上)				周辺概念 (全体の中央値5.1未満)			
No	語群	M	SD	No	語群	M	SD
1	残っている、名残り	6.21	1.1	26	仕草、行動	5.06	1.7
2	姿、見た目、容姿	6.11	1.1	27	親	5.01	1.7
3	顔、顔つき、顔立ち	6.07	0.9	28	場所、風景、情景	4.93	1.7
4	昔、過去、以前	6.05	1.2	29	今はなくなった、もうない	4.92	1.8
5	懐かしい、懐かしむ	6.02	1.1	30	共通する、共通点	4.91	1.8
6	雰囲気、様子	5.97	1.2	31	感じる、感じ取る	4.82	1.6
7	記憶、思い出	5.93	1.3	32	なんとなく、なんか	4.78	1.7
8	小さい頃、幼い頃	5.90	1.1	33	古い	4.77	1.5
9	人、人物	5.87	1.2	34	血縁関係、血のつながった	4.56	1.8
10	似ている	5.77	1.4	35	見る、見える	4.53	1.8
11	部分、特徴、要素	5.77	1.2	36	友人、友達	4.51	1.5
12	思い出す	5.76	1.2	37	久しぶり	4.50	1.8
13	比べた時、見比べた時	5.75	1.5	38	物、対象	4.49	1.7
14	重ねる、重なる	5.73	1.3	39	思う	4.44	1.6
15	写真、アルバム	5.67	1.3	40	今、現在	4.36	1.7
16	ぼんやり、かすか	5.62	1.4	41	知人、知り合い	4.32	1.7
17	印象	5.50	1.6	42	親戚	4.30	1.7
18	思い浮かべる	5.42	1.6	43	自分	4.17	1.6
19	子ども	5.37	1.3	44	変わらない、変化しない	4.12	1.8
20	成長	5.36	1.5	45	性格	3.81	1.7
21	家族、親子	5.35	1.6	46	寂しい	3.81	1.7
22	イメージ	5.35	1.5	47	持つ、持っている	3.54	1.6
23	会った時、再会した時	5.32	1.8	48	悲しい	3.34	1.6
24	連想する	5.31	1.6	49	別の誰か、他人	3.22	1.8
25	変わる、変化している	5.21	1.6	50	違う	3.11	1.8

して分析した結果、5 因子 18 項目が抽出された (表 2)。各因子の構成内容に基づき、それぞれ以下のような因子名を名づけた。

- (1) 「容貌・類似」因子：「姿、見た目、容姿」「残っている、名残り」「顔、顔つき、顔立ち」「似ている」「比べた時、見比べた時」「部分、特徴、要素」の 6 項目から構成。
- (2) 「時間・懐古」因子：「変わる、変化している」「会った時、再会した時」「小さい頃、幼い頃」「懐かしい、懐かしむ」「昔、過去、以前」の 5 項目から構成。
- (3) 「記憶・想起」因子：「思い出す」「記憶、思い出」「思い浮かべる」の 3 項目から構成。
- (4) 「心像」因子：「イメージ」「連想する」の 2 項目から構成。
- (5) 「血縁」因子：「家族、親子」「子ども」の 2 項目から構成。

表2 面影の中心概念の評定値に対する因子分析結果
(主因子法、プロマックス回転、パターン行列)

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	共通性
1 容貌・類似						
姿、見た目、容姿	.779	-.211	.070	.080	.025	.531
残っている、名残り	.607	-.001	.194	-.062	-.179	.431
顔、顔つき、顔立ち	.574	.130	-.031	-.012	.151	.504
似ている	.529	-.019	-.116	.168	.165	.363
比べた時、見比べた時	.431	.418	-.212	-.026	-.137	.458
部分、特徴、要素	.410	-.037	.099	-.036	-.023	.179
2 時間・懐古						
変わる、変化している	.010	.772	.052	-.021	-.140	.578
会った時、再会した時	-.258	.772	-.003	.142	.091	.460
小さい頃、幼い頃	.096	.511	-.073	-.076	.321	.508
懐かしい、懐かしむ	.048	.468	.136	.195	.003	.383
昔、過去、以前	.009	.408	.278	.044	-.147	.294
3 記憶・想起						
思い出す	.084	-.096	.688	.012	.105	.518
記憶、思い出	-.002	.068	.670	.061	.133	.548
思い浮かべる	.039	.100	.603	-.088	-.082	.382
4 心像						
イメージ	.030	.058	-.006	.762	-.107	.570
連想する	.056	.131	-.019	.589	.120	.450
5 血縁						
家族、親子	-.038	-.156	.055	.127	.759	.583
子ども	.083	.214	.060	-.275	.512	.425
因子間相関						
因子1	-	.522	.325	.083	.327	
因子2		-	.224	.139	.284	
因子3			-	.370	.081	
因子4				-	.216	
因子5					-	

【考察】

本調査の結果から、面影という概念には、いくつかの典型的な意味が内包されており、それが広く共有されていることが示された。

まず冒頭に述べたように、面影は「心のなかの記憶や心的イメージ」という内在的印象と、「目の前の対象に見いだされるもの」という外在的印象の二つの意味を持つ。前者の意味に対応する因子としては「記憶・想起」因子や「心像」因子、後者に対応する因子としては「容貌・類似」

因子がそれぞれ抽出された。つまり、面影は記憶内の表象を思い出したり、ぼんやりとイメージするといった内在的な意味を持つ一方で、眼前の人物の姿や顔つきのなかに見出されるという外在的な意味も有することが示された。

そして面影を認知するときには、記憶表象と眼前対象間の類似性が評価されるが、後述するように、この両者の間には時間的な連続性がある。つまり面影は、同一人物の異年齢の顔同士あるいは親子のような血縁者の顔同士のように、時間的連続性のある対象同士に対して特に多く用いられる。このような、単なる類似性評価にとどまらない面影の特徴を反映しているのが、「血縁」因子といえる。

また、これも後述するが、異年齢間や血縁者間での「類似性／相違性評価（似ている／似ていない）」を、「時間的変化評価（変わらない／変わった）」や「時間的印象評価（懐かしい、寂しい）」に変換するのが、面影に特有の認知過程と考えられる。「時間・懐古」因子はこれを反映しており、面影を感じる時、そこに類似性／相違性を感じるだけでなく、昔・過去や成長など時間の流れを感じたり、懐かしさや寂しさを感じたりするのが、面影の認知の構成要素となっている。

以上の面影に内包される因子を踏まえ、以下ではその関係性や概念構造について考察してゆく。

3. 調査結果から見える二つの面影：「記憶優位型面影」と「知覚優位型面影」

ここでは、面影に内包される意味を整理し、今回の調査結果とも対応づけながら、それらの関係性について考察する。なお、面影という言葉は風景や建築物、乗り物などに対しても用いられるが、ここでは特に人物の顔に対して面影を感じる認知過程に焦点を当てる。

大原(2020)は、面影に関わる記憶表象の特徴として、以下の点を挙げている。

- (1) 面影は既知の人物に対して感じる場合が多い。つまり、その容貌に何度も繰り返し接することで、その記憶表象が形成されている人物に対して生じることが多い。
- (2) 面影に関わる眼前対象と記憶表象は、同じ人物の年齢の異なる顔同士、あるいは血縁関係のある人物同士といった時間的連続性を持つ。

したがって、面影に関わる記憶表象は、時間的連続性が保証された既知人物に関する「その人らしさ」についての記憶表象といえる。ただし、このような記憶表象それ自体が、面影を意味するのではない。

このような記憶表象の想起という「内的世界」と、それに関連する眼前対象の存在や不在という「外的世界」の間の相互的な関わりのおかげで生じる意識体験が面影といえる。そして、面影が外部と内部のどちらに定位されるかによって、そこに立ち現れる面影の性質も異なることになる。言いかえれば、この内在的印象と外在的印象のどちらが優位となるかによって、面影の感じられ方や表現のされ方は変わることになる。

眼前対象のなかで記憶表象との類似性を顕著に残っている場合には「面影がある」や「面影が残る」など外在的な表現となることが多い。一方、眼前対象に類似点が少ないあるいは残っていないため、想起された記憶表象のほうが顕著となる場合には、「面影が浮かぶ」や「面影を偲ぶ」といった内在的な表現となることが多い。ただし、記憶の顕著性のほうが高くとも、それが外的

世界に定位される場合には「面影を探す」や「面影を重ねる」といった外在的表現となることもある。

これらの表現は、冒頭から述べている面影の二つの辞書的意味と対応しており、さらに今回の調査で見出された「容貌・類似」因子、ならびに「記憶・想起」因子や「心像」因子にも反映されている。本稿では、これら二つの面影をそれぞれ「知覚優位型面影」と「記憶優位型面影」と呼ぶ(表3)。

まず、眼前の知覚対象に記憶表象と類似する特徴が多く残っているために、外発的に記憶表象が想起され、そこに面影を感じる。このような知覚情報の主導によって受動的に認知される面影が、知覚優位型面影である。この面影は、「目の前の対象に見いだされるもの」という辞書的意味や、「容貌・類似」因子と対応しており、外的世界のほうに存在するような印象を生み出す。

一方、眼前の対象に記憶表象との類似点は少ないが、その両者の時間的連続性が保たれている場合、記憶表象によって認識が補完され、面影を感じる。このような記憶情報が優位となって内発的に認知される面影が、記憶優位型面影である。この面影は、「心のなかの記憶や心的イメージ」という辞書的意味や、「記憶・想起」因子や「心像」因子と関連があり、内的世界のほうに存在するような印象を生み出す。ただしその一方で、その記憶表象を外部に投影したり、探索したりする能動的過程を経て、外的世界に定位された印象を生み出す場合もある。

なお、これら二つの面影は、それぞれ独立したものではなく、認知処理過程において知覚情報(外部情報)と記憶情報(内部情報)のどちらのほうが優位となるかという観点からの分類といえる。以下ではこれら二つの面影の特性について、それぞれ考察してゆく。

表3 知覚優位型面影と記憶優位型面影の特徴

	知覚優位型面影	記憶優位型面影
眼前対象	記憶表象との類似性 高 不変項 多	記憶表象との類似性 低/無 不変項 少/無
契機	外発的・受動的	内発的・能動的
定位先	外的世界へ定位(外在的印象)	内的世界へ定位(内在的印象) 外的世界へ定位(外在的印象)
表現	「面影がある」「面影が残る」	「面影がない」「面影を偲ぶ」 「面影を重ねる」「面影を探す」

4. 知覚優位型面影：「類似性評価」と「時間的変化評価」

知人の子どもの頃の顔写真のなかに、現在の顔に通ずる特徴や雰囲気が強く残っている場合、あるいは、知人の血縁者（親や子どもなど）の顔立ちのなかに知人との類似性を強く感じる場合などに、私たちは「面影がある」や「面影を感じる」「面影が残る」といった表現をする。

このような、眼前の人物の特徴がその人物の記憶表象との類似性を多く持つために、外発的あるいは受動的に生じる面影が知覚優位型面影である。知覚優位型面影は、眼前の知覚情報によって駆動されるため、外的世界に定位され、外在的印象を生み出しやすい。今回の質問紙調査において抽出された「容貌・類似」因子は、このような面影の特徴に対応している。

4.1 面影の認知と類似性評価

知覚優位型面影が認知されるのは、記憶表象との類似的特徴が眼前対象内に多く含まれている場合である。では、このような類似性の評価はどのように行われているのだろうか。

たとえば Bruck, Cavanagh, & Ceci(1991)は、高校時代の同級生の25年後の顔写真を見たとき、その人物同定が可能であることを明らかにしている。特定の人物に何度も接するなかで、その顔の角度や表情などといった一時的変化に依存しない、その人物の顔に潜む「その人らしさ」が記憶される。そのため、発達や加齢による長期的変化が生じた顔であっても、このような「不変項」を検出することで、同定ができると考えられる。

また真覚(1999)は、同一人物の異年齢（5歳前後と20歳前後）の顔同士、あるいは異なる人物の顔同士を同時提示し、両者の類似性評価を求める実験を行った。その結果、年齢が異なるにもかかわらず、異なる人物対よりも同一人物対のほうが類似性が高く評価されることを報告している。この結果もまた、年齢により変化した顔の間に何らかの不変項を検出できている可能性を示している。なお、この研究においても、未知人物よりも既知人物の顔のほうが類似性が高く評価されており、既知人物の顔のほうが不変項が構築・検出されやすいことを示唆している。

このような顔同士の間の類似点は、眼前対象の目鼻立ちといった顔部品の場合もあれば、目の間の距離や鼻と口の距離といった部品配置の場合もあるだろう。あるいは、その人特有の表情や仕草などの動的情報や、言語化しにくい雰囲気の場合もあるかもしれない（注1）。

たとえば真覚・丸山・赤松(1995)は、同時提示した二枚の顔写真の類似性評価において、眉・目領域や鼻・口領域の類似性が特に重視されていることを報告している。また高野・阿部(1996)は、三枚の顔写真のなかから似ている二枚の写真を強制選択させる実験を通して、眉・目領域に加えて、輪郭もまた顔の類似性判断において重要であることを示している。さらに加藤・向田(2013)は、二つの顔の間で典型的（平均的）な特徴が似ている場合より、示唆性の高い（平均から逸脱した）特徴が似ている場合のほうが、類似性の印象が強まることを報告している。

このような特定の人物との類似性を眼前対象が多く有する場合、知覚優位型面影が立ち現れると考えられる。では面影の認知は、単なる類似性の認知と何が異なるのだろうか。以下に述べるように、面影の認知特有の機能的特性が考えられる。

4.2 眼前対象と記憶表象間の時間的連続性に基づいた類似性評価

まず先述のように、人の顔に面影を感じるとき、眼前の顔と記憶表象内の顔は、同一人物の異なる年齢の顔同士、あるいは血縁関係のある人物の顔同士のように、直接的あるいは間接的な時間的連続性を持つ場合が多い。これは、今回の調査において「血縁」因子が抽出されたことからわかる。

まったく別人同士の顔が似ている場合には、単に「似ている」あるいは「そっくり」などと表現されることが多く、「面影がある」と表現されることは少ない。つまり面影に関わる類似性とは、時間的連続性の保たれた対象の異なる時制の間での類似性といえる。

面影の認知をその処理過程からみた場合、まず、眼前対象と記憶表象の照合が行われ、時間的連続性のある人物であるという同定処理が行われる。そして面影の認知処理は、この同定処理を経た後に始動すると考えられる。つまりその時間的連続性の保証のもと、眼前対象と記憶表象間で類似性／相違性が評価されてゆく過程で、面影は立ち現れるのではないだろうか。

これは、面影の認知処理が、高次の意味処理レベルにおいて「同じ（時間的連続性がある）」とみなされた後、それよりも低次の知覚処理レベルにおいては「似ている／似ていない」と評価されるという二層構造の処理であることを意味する。つまり面影は、同一性が担保された上で、類似と差異が揺らぎながら顕在化される知覚体験といえるだろう。

このことは、面影の認知が、対象の同定・認識処理よりもむしろ、その対象に対する印象評価処理との関連が強い可能性も示唆している。そしてその印象評価は、類似性の評価に加えて、次に述べる相違性評価や時間的評価から構成されると考えられる。

4.3 視覚的な類似性／相違性評価から時間的変化評価への変換

知覚優位型面影は、眼前対象と記憶表象がまったく同じ場合や、逆にまったく異なる場合には生じにくい。むしろ、記憶表象と似ているところもあれば似ていないところもある眼前対象に対して、面影は強く感じられる。したがって、知覚優位型面影の認知には、類似性の評価だけでなく、相違性の評価も含まれる。そして、面影の認知特有の特性は、この相違性の評価においても認められる。

それは、検出された知覚的差異を時間的変化に変換し認識するという特性である。つまり面影の認知においては、記憶表象と眼前対象の間の時間的連続性が保たれているゆえに、その「知覚的差異（似ていない）」は「時間的変化（変わった、失われた）」として認識される。さらにその変化を生み出した「時間の流れ」や「過ぎ去った時間の長さ」が認知されることもある。今回の調査において「時間・懐古」因子が抽出されたことからわかるように、時間的変化や時間の流れは面影の重要な構成因子といえる。

そして、このような知覚的差異から時間的変化への変換が生じる主な原因は、眼前対象と記憶表象間の相違点の多くが、発達や加齢による経年変化に基づいているからであろう。つまり、成長や老化によってどのくらいその人物の容貌が変化したかが、相違性の程度を決定づける。

人間の場合、顔の経年変化は大きく二つの段階に分けられる。ひとつは乳幼児期から成人期にかけての骨格の変化である。発達による骨格変化は、カージオイド変換に近似することがわかっ

ており (Todd, Mark, Shaw, & Pittenger, 1980)、とりわけ顔の横幅や顔の縦の長さなどが年齢評価の手がかりとなっている (山口・加藤・赤松, 1996)。

一方、成人後は骨格の変化よりもむしろ、皮膚のたるみやしわといった表面上の変化が主となる (齋藤, 2015)。さらにこのような経年変化に加えて、個人差はあるが、太ったり痩せたりといった可逆性の変化が加わる場合もあるだろう (注2)。

このような発達・加齢によって生じた容貌の知覚的差異が、過ぎ去った時間の長さなどの時間的変化の評価に変換される。さらにそれに伴って「懐かしい」や「寂しい」といった時間的な印象評価が下されることになると考えられる (注3)。

以上のように、眼前対象と記憶表象間の差異が、時間的変化評価の手がかりとして検出される。その一方で、両者間の類似点、すなわち年齢などの影響を受けにくいその人物特有の顔部品の形態や配置、雰囲気などは、「その人物の変わらなさ」や「その人らしさ」といった不変項として検出され、「面影がある」という印象評価の手がかりとなる。このようにして、類似点に対しては「変わらなさ」を認識するとともに、相違点には「時間のうつろいや長さ」もまた感じる。この両者の間で印象が揺れ動くことにより、面影特有の主観的体験が生み出されると考えられる。

5. 記憶優位型面影：「不在の認知」と「面影の適応的变化」

5.1 「不在の認知」が契機となる面影

眼前の知覚対象に特定の人物の不変項が強く検出される場合、「面影がある」や「面影が残る」といった知覚優位型面影が認知される。その一方で、眼前対象と記憶表象の類似性が少なかったとしても、時間的連続性が保たれている場合には、当該人物に関する記憶表象が想起され、その面影を感じる場合がある。このような面影が記憶優位型面影である。記憶優位型面影は、「面影を思い浮かべる」や「面影を偲ぶ」「面影を重ねる」「面影を探す」などといった表現に繋がり、今回の質問紙調査において抽出された「記憶・想起」因子や「心像」因子に対応している。

たとえば数十年ぶりに再会した人物が、生活環境の変化や病気のために、かつての容貌と大きく異なっているような場合、「面影がない」と評価される場合もある。しかしその一方で、同一人物であることが保証されているため、その人物のかつての容貌についての記憶表象が想起されることもある。あるいは、死別や離別により今は眼前にいない人物であっても、その人物にまつわる場所や物品を前にしたとき、その人物の在りし日の顔や行為、エピソードなどに関する記憶表象が想起されることもある。

このような記憶優位型面影は、内的世界に定位され、内在的印象を生み出し、「若い頃の面影を思い浮かべる」や「故人の面影を偲ぶ」などと表現されることになる。さらに「在りし日の面影を重ねる」や「かつての面影を探し求める」といった表現に見られるように、記憶優位型面影は、外的世界に投影・探索されることにより、外在的印象を生み出す場合もある。

記憶優位型面影の多くは、かつて存在していたが今はもうない、そんな「不在」を認知することが契機となると考えられる。不在とは「はじめから存在しない」ということではない。「かつて存在していたが、(その一部、あるいはすべてが)今は存在しない」というのが、ここでの不

在の意味である。このような「不在の認知」によって駆動され、その不在を補完するように記憶表象が想起される現象が記憶優位型面影といえる。

以下では、自分にとって重要な人物との死別による悲嘆体験に特に焦点を当て、記憶優位型面影の特性について考えてみたい。

5.2 死別者についての記憶表象の想起と適応的变化

Harvey(2000)は、自分にとって重要な(愛着、思い入れのある)人物のように、日頃の生活のなかで感情的な投資をしてきた対象との離別・死別を「重大な喪失」と呼んでいる。そして、重大な喪失によって、遺された者は長期間に渡って悲嘆を体験することになる。

Worden(2009)は、悲嘆体験の特徴を、感情や身体感覚、認知、行動の側面から分類している。そのなかでも認知的特徴としては、悲嘆を体験している人は、いまだ故人が現実の世界に生きているかのように感じることを挙げている。また行動的特徴としては、故人が亡くなった場所やお墓、写真など、辛い思い出や感情を喚起する対象を避ける反応を示す人がいる一方で、故人の思い出の品や遺品を持ち歩いたり、宝物にしたりするといった反応を示す人がいると述べている。

このような悲嘆体験の心理的特徴を面影と関連づけて考えてみると、(不在となってしまった)外的世界と(それでも記憶が残る)内的世界の間で、面影の折り合いがつかなくなった心理状態と解釈することができるのではないだろうか。

山本(2014)は、喪失反応を、主観的に感じられた内的状態としての喪失/喪失感である「心理的喪失」と、顕在的な外的事実としての喪失/別離である「物理的喪失」の二つに区分している。さらに、この二つの喪失反応の有無の組み合わせにより、喪失体験の時間的変化を以下のように説明している。

- (1) 予期の様態(様態A): 末期がん患者の家族が死別を予期している状態のように、愛着の対象が物理的には存在しているが、心理的には喪失しつつある状態。
- (2) 剥奪の様態(様態B): 実際に死別を経験し、悲嘆にくれている状態のように、愛着の対象を物理的にも心理的にも喪失してしまった状態。
- (3) 補償の様態(様態C): 故人についての記憶が再構築され、現実の生活との折り合いがつき、喪失の傷が癒えてゆくような、物理的には喪失しているが、心のなかでその対象が補償されていく状態。

そして、様態Bから様態Cへの移行が、悲嘆から回復に至る「喪の過程」であると主張している(注4)。

また山本・岡田(2013)は、死別した人物が登場する「悲嘆夢」の内容について調査分析をした。その結果、悲嘆夢の内容は(1)故人の喪失に再び直面したり、故人との別れをやり直したりする内容、ならびに(2)故人と再会したり、喪失前の日常の交流が再現されたりする内容の二つに大別できることを明らかにした。そして、前者の悲嘆夢には故人との関係を「切る機能」、後者には逆に故人との関係を「結ぶ機能」があり、これら二つの機能を通して、夢のなかで故人との関係性を再構築することで、悲嘆から回復してゆくと推察している(山本・岡田, 2013)。

以上のように、喪失による悲嘆からの回復には、物理的喪失と心理的存在の折り合いをつけて

ゆく作業、特に、外的世界における不在と折り合いがつくよう、内的世界における故人の記憶表象の意味づけを再構築してゆく必要がある。これは、内的世界と外的世界の相互作用である面影を適応的に変化する過程と解釈できる。

そして、このような面影の適応的变化においては、夢見体験のなかにその人物を登場させたり、次に述べるような、故人にゆかりのある遺品や形見、場所などに関わったりすることが有効といえる。

5.3 物品・場所に定位・投影される面影

遺影は、ある人物の死後、遺された者が最も目にする機会の多い故人の顔写真の一つである。したがって、遺影に故人の「その人らしさ」が色濃く写し出されていれば、そこから在りし日の故人の面影を感じ取ることができ、さらには面影の適応的な変化にも結びつくことになるだろう(注5)。

また遺影以外にも、故人が使っていた遺品や写真、手紙などは、単なる物品ではなく、故人との心理的つながりを認知させる「連結対象 (Volkan, 1972)」と呼ばれる。そして、これらの物品もまた記憶優位型面影の契機となりうる。つまり、その物品を目にしたとき、かつてそれを使用していた故人の姿や仕草、その時のエピソードなどに関する記憶が想起されることになる。

池内(2006)は、形見の内容やその役割などについて調査検討した。その結果、形見には、喪失後の回復過程に応じて「喪失対象の身代わり」や「喪失対象との関係維持の象徴」「悲嘆を軽減してくれる心の拠り所」「喪失対象が確かに存在していたという証」「喪失対象の一部」などの意味づけがなされており、形見は残された者の心の支えになる役割を持つことを報告している。つまり、外的世界と内的世界の間で面影の折り合いをつけてゆく上で、形見や遺品は大きな役割を持つ。

同様に、位牌や墓もまた面影を誘発する対象といえるだろう。遺影のようにその人物の具体的な姿を模しているわけではないが、位牌や墓の前に手を合わせているとき、その人物に関する記憶表象が想起される。さらにはその表象が、外的世界に定位・投影される(中田・川合, 2019)。そして、その人物の外在的印象を抱きながら、思いを馳せたり、話しかけたりすることになる。

悲嘆からの回復に関わるグリーフケアにおいては、「エンプティチェア (空の椅子)」と呼ばれる技法が有効といわれている(山本, 2014)。この技法は、心のなかに思い浮かべた故人を、目の前の椅子に座らせて、その人物に向かって実際に話しかけるというものである。この技法もまた、位牌や墓の前で手を合わせるのと同様に、想起した記憶表象を眼前の場所に能動的に定位・投影することで、外的世界と内的世界の間で面影を適応的に変化することが、悲嘆からの回復の一助となることを示している。

そして以上のような特性が、一般的な記憶想起やイメージ喚起とは異なる記憶優位型面影の特徴ともいえるだろう。記憶優位型面影は、ある人物がかつて存在していた場所や、その人物とゆかりのある物品などに規定された記憶の想起といえる。つまり、その人物の不在の認知が契機となり、それを補完するように、その場所や物体に記憶表象が定位・投影されるという能動的な反応が、記憶優位型面影の大きな特徴といえるのではないだろうか。

ただし、このような記憶型優位面影の特性はいまだ仮説の域を出ていない。不在の認知を契機とした眼前対象への定位・投影反応や探索反応などが実際に生じているのかについては、今後の実証的な検証が必要である。

6. まとめと今後の課題・展望

6.1 本稿のまとめ

本稿では、面影という概念に内包される意味構造を捉えるため、まず質問紙調査を実施した。その結果、面影の意味として、「容貌・類似」因子、「時間・懐古」因子、「記憶・想起」因子、「心像」因子ならびに「血縁」因子の5因子が抽出された。

さらに、この結果も踏まえながら、面影について以下のような考察をしてきた。

- (1) 面影は、眼前対象と記憶表象間に時間的連続性がある場合に、その類似性／相違性が評価されることで生じる。さらにその類似性／相違性の程度によって、二つの面影の現れ方、「知覚優位型面影」あるいは「記憶優位型面影」が生じる。
- (2) 知覚優位型面影は、眼前対象内に記憶表象との類似性が顕著に含まれている場合に、その知覚情報によって外発的・受動的に認知される面影である。さらに、この面影は外的世界に定位されることで、外在的印象を生み出す。
- (3) 知覚優位型面影を認知する際、眼前対象と記憶表象間の相違性評価は、時間評価に変換される。そして、類似性評価に基づく面影の評価とともに、「変わった」と「変わらない」の間を揺らぐ複合的な印象を生み出す。
- (4) 眼前対象内に記憶表象との類似性が少ない場合であっても、そこに時間的連続性が保たれている場合には、記憶表象の想起によって内発的・能動的に面影が認知される。これが記憶優位型面影である。
- (5) 記憶優位型面影は、眼前対象が存在していなくとも、その対象とゆかりのある場所や物体などがあれば、そこに不在を認知することが契機となり駆動されうる。
- (6) 記憶優位型面影は、内的世界に定位され、内在的印象を生み出す場合もあれば、特定の場所や物体に定位・投影されることで、外在的印象を生み出す場合もある。
- (7) 「重大な喪失」による悲嘆からの回復過程は、外的世界と内的世界の間で面影を折り合いをつけ、適応的に変化する過程と解釈できる。

面影の認知は、基本的に眼前対象と記憶表象の間の照合過程において生じる。そういった意味では、一般的なパターン認知やオブジェクト認知と同様の処理過程といえるかもしれない。しかしながら、面影の認知の特異性は、本稿でも述べたように、眼前対象と記憶表象の間に時間的連続性が保証されている点、すなわち同定処理の完了が前提となっている点である。

その上で両者の類似性に基づいて、知覚優位型面影による外在的印象が生じたり、記憶優位型面影による内在的印象が生じたり、あるいは外部への定位・投影反応が生じたりといった多様性を見せる。そして、外在的印象と内在的印象のいずれか一方が面影なのではなく、その間で揺ら

ぐ主観的印象が面影の特徴といえる。さらには眼前対象と記憶表象間の類似性評価（似ている）と相違性評価（似ていない）の間でも主観的印象が揺らぎ、時間的変化評価が生まれることも面影の特徴といえるのではないだろうか。

6.2 今後の課題と展望

本稿では、面影という概念を心理学の観点から捉え、その意味構造について考察を行ってきた。しかしながら、それらの多くは仮説の域を出ておらず、今後、実証的検討を通していく必要がある。最後に、今後の課題と展望を列挙する。

(1) 知覚優位型面影を駆動させる外的要因

眼前の人物に記憶表象との類似点が顕著に見出された場合に、知覚優位型面影は立ち現れる。本稿では、この類似点を「不変項」や「その人らしさ」と呼んだが、これは具体的にはどのような視覚的特徴なのだろうか。顔部品やその配置、あるいは動的情報などのうち特に重要な特徴は何か、さらにこのような特徴が個人間でどの程度共通しているのかなどについては今後の検討が必要である。

(2) 知覚優位型面影に伴う相違性評価から時間評価への変換

本稿では、知覚優位型面影を認知した際の、眼前対象と記憶表象間の相違性評価の結果が時間的変化や時間の流れといった時間評価へ変換されるのではないかという仮説を提唱した。面影の程度や相違性の程度によって、実際に時間評価が変動するかどうかを検討してみる必要がある。

(3) 知覚優位型面影の感性評価としての可能性

人物以外の、風景や建築物、乗り物などに対しても「以前の面影が残る」や「先代の面影がある」といった表現が用いられ、さらには肯定的あるいは否定的な評価が下されることがある。このことは面影評価やそれに伴う時間評価が、風景や物品に対する感性評価の一つとなりうることを示唆している。したがって、風景や物品に対する面影認知の特性を探ることは、景観デザインや工業デザインなどの感性評価研究に対して、有益な知見を供給できる可能性がある。

(4) 記憶優位型面影に伴う定位・投影反応の把握

眼前対象内に記憶表象との類似点が少なくとも、両者間に時間的連続性が保証されている場合には、記憶優位型面影が喚起され、それが眼前の対象に定位・投影されると、本稿では推察した。このような能動的反応が実際に起っているのであれば、眼前対象に面影を感じた場合と感じなかった場合で、その眼前対象の認知のされ方や記銘のされ方が異なる可能性がある。このような点も今後検討する必要がある。

(5) 悲嘆体験からの回復過程における面影の適応的变化

重大な喪失による悲嘆を体験している状況は、外的世界と内的世界の間で面影の折り合いがつかない状態であり、その面影を適応的に変化してゆくことが、悲嘆からの回復につながる可能性がある。面影の適応的变化を促す上で、どのような写真を遺影として使用することが効果的なのか、墓や形見以外にどのような場所や物品が効果的なのか、そしてそれらの眼前対象とどのような関わり方をすることが効果的なのかなどについて検討することは、新しいグリーフケアの技法の開発に繋がる可能性がある。

注

- 注1 これは今回の調査において、「部分・特徴・要素」に加えて、「雰囲気・様子」や「ぼんやり・かすか」の評定値も高かったことから示唆される。つまり面影に関わる類似性は、具体的に指摘しやすい特徴や要素だけでなく、言語化のしにくいぼんやりとした雰囲気のようなものとしても捉えられている可能性がある。
- 注2 おそらくは骨格のような構造的変化があるにもかかわらず、以前の特徴(不変項)が残っている場合に「面影がある」と表現されるのではないだろうか。一方、たるみやしわのような表層的变化がある場合には、「面影」という表現よりもむしろ「若い／老けた」という表現が用いられることが多いのではないだろうか。
- 注3 幼少期の写真に対して現在の面影を感じる場合、被写体の年齢手がかりに加えて、写真そのものもまた時間的手がかりを持つ可能性がある。例えば、写真の色合いや、コントラストやノイズなどの画質は、その写真がどのくらい昔に撮影されたのかといった時間印象に影響を及ぼす(佐藤・児守・清水・青木・小林, 2008; 藤原・福森, 2017)。これらの画質的情報もまた間接的な時間的手がかりとして、面影に関わる時間的変化評価を高める可能性はあるだろう。
- 注4 様態Aは、末期がんなどのように、死別までに時間的余裕がある場合に生じる悲嘆の様態である。一方、事故や自殺、殺人事件などによる突然の死別の場合は、様態Aがなく、様態Bが急激に始まる状態といえる。このような離別に対する予期の有無によっても、その後の面影の現れ方は異なるだろう。
- 注5 眼前の顔写真に面影を感じ取るという意味では、遺影に関わる面影は知覚優位型面影と捉えることも可能ではある。しかし、遺影に用いられる写真を、その人物がまだ存命の間に見たときと、死後に見たとき、より厳密に言えばその人物の死を知った後に見たときでは、その写真から感じられる面影の程度は異なるのではないだろうか。つまり、その人物はすでにこの世にいないという知識があることで、面影は増幅されるのではないだろうか。したがって、遺影に関する面影も、不在の認知によって駆動された記憶優位型面影と捉えるほうが妥当といえる。

付記

本研究は、科学研究費補助金(課題番号:18K18697、研究代表者:大原貴弘)の助成を受けた。

引用文献

- Bruck, M., Cavanagh, P., & Ceci, S. J. (1991). Fortysomething: Recognizing faces at one's 25th reunion. *Memory & Cognition*, *19*(3), 221-228.
- 藤原美佳・福森 護 (2017). セピア調映像の心理的効果に関する探索的検討 *中国学園紀要*, *16*, 75-82.
- Harvey, J. H. (2000). *Give sorrow words: Perspectives on loss and trauma*. Psychology Press. (安藤清志 監訳. 2002. *悲しみに言葉を: 喪失とトラウマの心理学*. 誠信書房)
- 池内裕美 (2006). 喪失対象との継続的關係: 形見の心的機能の検討を通して *関西大学社会学部紀要*, *37*(2), 53-68.
- 加藤 隆・向田 茂 (2013). 顔の類似性における部位の示差性効果 *日本顔学会誌*, *13*, 43-50.
- 真覚 健 (1999). 成長に伴う顔の構造的変化に対する顔認知の頑健性について *映像情報メディア学会技術報告*, *23*, 45, 31-36.
- 真覚 健・丸山欣哉・赤松茂 (1995). 写真顔の類似性判断 *東北心理学研究*, *45*, 48.
- 中田龍三郎・川合伸幸 (2019). 社会的な存在—他者—をプロジェクションする *認知科学*, *26*(1), 86-97.
- 松村 明 (2006). *大辞林第三版*. 三省堂.
- 新村 出 (2008). *広辞苑第六版*. 岩波出版.
- 大原貴弘 (2020). 「面影」に関わる心理的過程 *医療創生大学研究紀要 人文学・社会科学・情報学篇*, *33*(5), 60-71.
- 齋藤 功 (2015). 顔の成長と発達. 日本顔学会 (編) *顔の百科事典*, pp.182-190, 丸善出版.
- 佐藤 慈・児守啓史・清水穂高・青木直和・小林裕幸 (2008). 画質が写真の時間印象に与える効果 *映像情報メディア学会誌*, *62*(3), 398-407.
- 高野ルリ子・阿部恒之 (1996). 顔の類似性と形態特徴の関連 *日本心理学第60回大会発表論文集*, 700.

- Todd, J. T., Mark, L. S., Shaw, R. E., & Pittenger, J. B. (1980). The perception of human growth. *Scientific american*, **242**(2), 132-145.
- Volkan, V. D. (1972). The linking objects of pathological mourners. *Archives of General Psychiatry*, **27**(2), 215-221.
- Worden, J. W. (2009). *Grief counseling and grief therapy: A handbook for the mental health practitioner*. Springer Publishing Company. (山本 力 監訳. 2011. 悲嘆カウンセリング: 臨床実践ハンドブック. 誠信書房).
- 山口真美・加藤 隆・赤松 茂 (1996). 顔の感性情報と物理的特徴との関連について—年齢 / 性の情報を中心に— *電子情報通信学会論文誌 A*, **79**(2), 279-287.
- 山本 力 (2014). 喪失と悲嘆の心理臨床学: 様態モデルとモーニングワーク. 誠信書房.
- 山本 力・岡田 碧 (2013). 死別に伴う「悲嘆夢」の内容と機能— 一切の機能と結ぶ機能の振り子過程— *岡山大学大学院教育学研究科研究集録*, **153**, 1-9.

(おおはら たかひろ / 認知心理学・実験心理学)